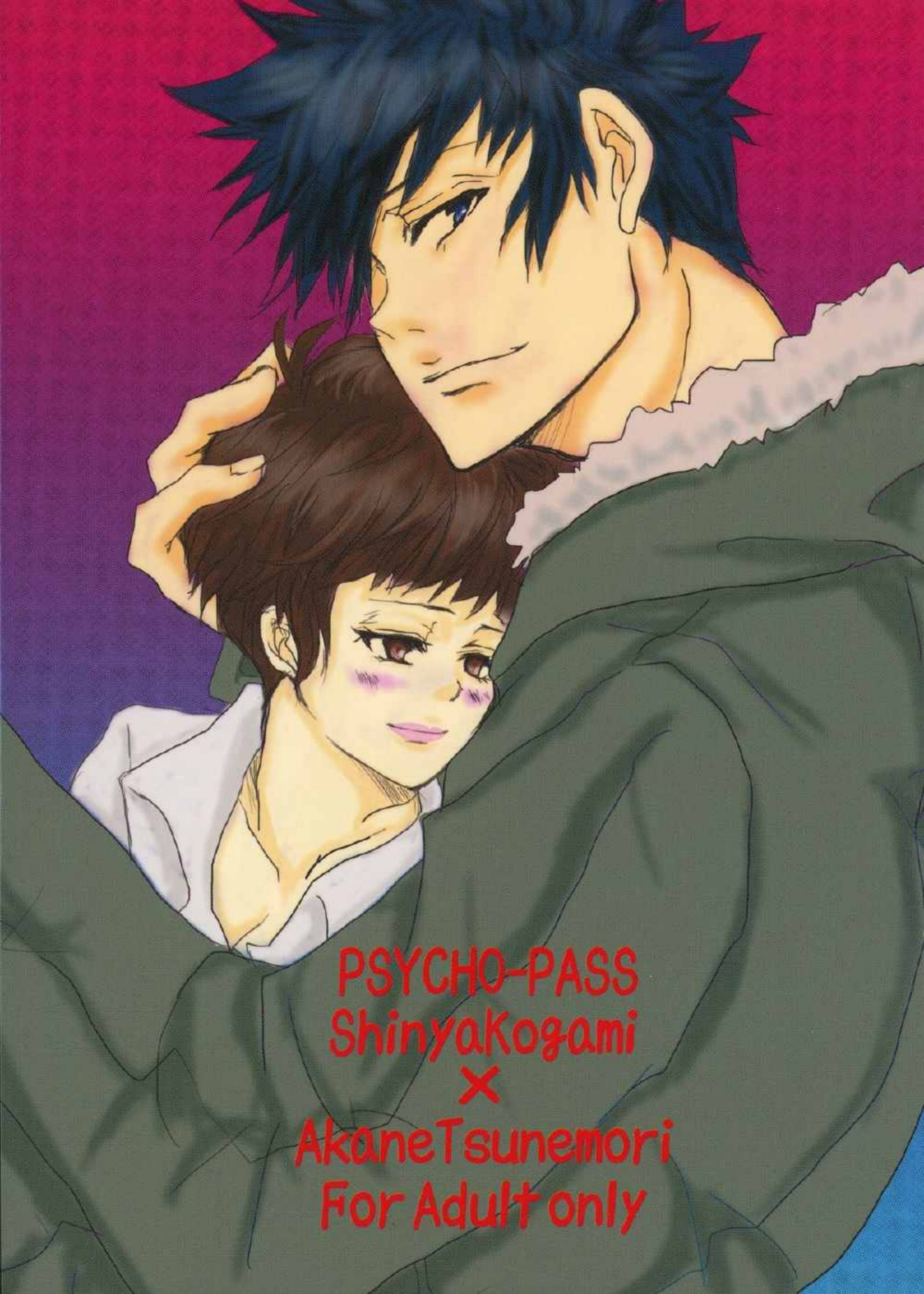


R 18
FOR
AGES 18
AND UP!



愛欲性番
24時



PSYCHO-PASS
ShinyaKogami
X
AkaneTsunemori
For Adult only

R18
FOR
AGES 18
AND UP!



愛欲性番
24時

目次

*AM6:00 / あずき	3ページ～
*AM10:00 / 如月	9ページ～
*PM2:00 / あずき	13ページ～
*PM6:00 / 如月	21ページ～
*PM8:00 / あずき	29ページ
*AM0:00 / 如月	30ページ～

注意

18歳未満の方の閲覧・購入・所持を固く禁じます。







だって
大人気ないな



す
ら



あんたは
許してくれるって
甘えた考えをしてる

こんな事を
しても



でも
これなら...

昨日のが
残ってたのか...

あ
あ



どこまでも
自惚れて
しまっている







AM10時

公安局監視官・常守朱は怒っていた。それもうぶんぶんに怒っていた。さすがにその怒りを職場で、他人にぶつけることはなかったが、どうみても不機嫌です、という顔を隠せないくらいには彼女はまだ幼く未熟だった。怒りの原因である男は同じフロアで何事もなかったようにタブレットを叩いている。そのすがすがしいほど何とも思っていないと言わんばかりの横顔を見てみると、余計に腹が立ってきた。

——宜野座さんに怒られたのは、狡嚙さんのせいなのにな。何を隠そうこの男のせいで遅刻したのである。朝っばらから欲しくなると食いつかれたまではまだよかった。仕事ですよ、とわずかに抵抗したものの、まあ一回だけならと身体を明け渡したのが間違いだった。

いつものとおりに「仕事の前はしません」と強気になるべきだったのだ。

昨晩は日付が変わったところに緊急出動が掛かり、非番だった二人も現場に駆り出された。雨の中を走り回り泥だらけになって犯人を無事確保。一時間程度だったとはいえ、ひどい汚れ様

だったため、宜野座がわざわざ直帰の許可を出してくれたのでそのまま狡嚙の官舎にだれ込み、シャワーを借りて、襲ってきた眠気に素直に従って文字通り布団に沈みこんだ。——のは朱だけだった。

真夜中の追いかけてこで身体の熱が高まってしまった猟犬は膨らむ肉欲を遠慮なしに押しつけてきて、あとは言うまでもない。

そんなこんなで散々暗闇の中で交わり乱れて、燃え尽きるように果てて。出勤時間ギリギリまで熟睡コースのはずだったのだが——。

オトコの性とは悲しいものかな。

朝からいきり立つ雄を突き立てられて、無遠慮にかき回された。

それにしたって手加減してくれてもいいじゃないか、と朱は今朝の事を思い出してまた頬を膨らませる。一回で済むと思っていたその甘い考えはあっという間に覆されたのだ。二人でシャワーを浴びてすぐに支度つもりだったのに、再び持ち上がった狡嚙の熱に背後から侵されて、気がつけば出勤時間を迎えていたのである。

宜野座が「二人とも弛んでるんじゃないのか」と怒りを露わにするのも当然のことだった。昨夜の宜野座の気遣いさえも無駄にしてしまったようで申し訳なすぎで朱がおとなしく説教を受けている横をこの男は何食わぬ顔で通り抜けていったのだ。

お前にも言っているんだぞ、と顔を蟹める宜野座に向かって狡囁はというと、はいはいわかったと手を翻すだけでまともに取り合おうとしないので、彼の方が諦めて大きなため息をつきながら帰って行ったのが一時間ほど前の話だ。

朝からあんなに激しくすることないのに――。

つい思い出してしまつて、頬が上気する。――いやだ、怒つていたはずなのに。

今朝自分の身体にされたことを思い返すと、一気に全身に血が巡りだす。火照っているのは頬だけではない。身体があつくて、スーツのスカートをぎゅうと握りしめる。ちらりとタブレットを叩いている男を見やると、気だるそうに唾え煙草のままモニターを見つめている。きっと今は昨夜の事件の報告書を纏めていっているのだろう。

あの気だるい瞳が、獲物を追う時にはギラリと鋭く刺さる眼光が、自分に向けられるときだけはどれだけ甘くて優しいか、朱は知っている。むしろ知っているのは朱だけだ。煙草を挟んでいる唇が、いったいどんな言葉を紡ぎ、身体に触れ、快感と幸福をもたらしてくれるのか、きっとそれも自分しか知らないのだからと思うと、胸がきゅうんと締め付けられるほどに愛おしくて、考えるだけで身体が蕩けてしまいそうになるのだ。

――見惚れている場合ではなかった。朝から無理を強いられ、遅刻して怒られて散々だったのだ。せめてごめんなさいくらいしてもらわなければ。

ちらりと横顔を覗いただけで収まるだなんて、なんて安い怒りなのだろう。うん、やっぱり謝罪の言葉くらいは欲しい。でもきっと彼は簡単にそんなことは口にしないだろう。

正面切って謝罪を求めたところでさっきの宜野座のように適当にあしらわれて、下手したら今朝の二の舞になるのだ。

ああやっぱり腹が立つ。

朱は一息つこうと椅子を引いて立ち上がった。

「――つ、ひ」

立ち上がった瞬間、ぞわりと身体の中を流れるものを感じ、息を詰める。中腰のままデスクに手を付いて身体を支え、悪寒をやり過ごす。

――これは今朝の名残だ。すぐに原因が頭をよぎり羞恥で顔が熱くなるのを感じた。

「どうした監視官」

「い、いえ……なんでもありません」

休憩に行ってきたすねと顔を背けて、表情を読まれやしないかと覗きこんでくる視線をやり過ごしてオフィスを出た。これが二人きりの自室であつたらあの厚い胸板をボカボカと叩いて訴えることも出来たかもしれない。

いつも中に出した残滓を始末するのは狡囁の仕事だった。

朱が仕事上避妊薬を服用しているのをもとより承知だった狡噛とは、初めてベッドを共にしたときから中へ熱を放たれることが常であったのだ。

そのため、と言ってはなんだが狡噛は普段から後始末はしっかりとしてくれる方だったが、残念ながら今朝はそんな余裕はなく、あふれ出たものを強引にふき取って慌てて服を着ただけだったのだ。

朱はトイレの個室に籠り、周りに他の人がいないことを確認すると一気に下着をずり下ろす。ぬちゃりと糸を引く感覚がして思わず息を詰めた。

クロッチに染み込んだ淡色の体液がぬらぬらと光って、朱の羞恥心を煽った。

ペーパーで陰部と下着のシミを拭きとるが、まだ拭いきれない濡れた感触が中に留まっている気がした。

——これは自分で始末をするしかないのか。

「…あつ、う」

意を決して秘裂に指を突き立てるも、ぬめりを拭きとられてしまっただけの乾燥した粘膜がひりひりと摩擦で痛み、息をのむ。立ったまま背を丸め、片腕を個室のドアについて身体を支えるようにしてようやくやく指が一本、ぬるついた中に収まった。

「はあ…も、やあ」

はやく、終わらせてしまいたい。

その一心でいつも狡噛がしてくる通りに、中のぬめりを攫

うように掻き取る。ぐろりと膣内を撫ぜ、袋を押し広げて中に留まる狡噛の名残を自分の指に絡め取っていく。

いつもは節くれだった指が奥まで潜り込んで、ときどきいいところに当たってしまい思わず喘ぐと「もう終いだ」と口角を意地悪に引き上げて彼は笑うのだ。

「も…やだ…こうがみさんの、ぼか…」

自分の指では届かない場所を抉る指の感触を思い出して、思わずきゅうんと締め付けるのを感じた。

これ以上は自分では処理しきれないと判断してずるりと指を引き抜く。

「こんなに、たくさん…」

ぬらぬらと光る指からとろりと体液が流れ落ちていく。

それは決して、彼だけのものではないけれど、朱はもう一度「ぼか」と零して、狭い個室の中で一人、まぶたをきゅうつと閉じ息を押し殺すのだった。



PM2:00







嫌がってるが
此処…すこい事になつてるぞ…

あつん
やあ…

ちや

ちや



これなら
すぐ
挿れられそうだな

ちや



舐めちや…ああん…ダメ…

あ



ああん

あ…

スチュ

ああん

スチュ

スチュ





狡噛さつ
ああ...やだあ
んん



ほら...こう
されたかったんじや
ないのか?



いきそうなのに
まだそんな
意地張るのか?



やつ...んん
んつあ...ちがつ

喜んでなつ...
あああつ



ああ
んん

素直になつたほうが
楽だぞ?



意地なんて
はつてないです...
はあ...ああつ





なっ
何言ってるんですか?!

こんなもの付けて
仕事なんて...

ああ...
集中は
できないかもな



PM6時

遅い。時間が進むのがとてつもなく遅い。

朱は時計を覗き込む度にそわそわと腹の底から這い上がる感情を抑えきれなくなっていた。

——早く、早く。一分一秒でも、早く。

こんなに気持ちを逸らせるのは他の誰でもない、狡嚙慎也のせいだ。今日は朝からずっと彼のペースに巻き込まれっぱなしだった。

朝から迫られて、遅刻して。怒っていたはずなのに、昼間に連れ込まれた資料室ではなぜか彼の方が怒りをあらわにして、そのままわけも分からず抱き込まれてしまった。

そして、あらぬところで振動を繰り返す小さな機械——朱の下着の中では昼間に狡嚙が忍ばせたローターが時折意地悪く動き出し、朱の身体を震わせてた。

お仕置きだと仕掛けられたそれは、さすがに出動が掛かれば狡嚙もローターを遠隔操作で起動させたりはしないだろうと踏んでいたのに、今日に限って世間は平和のようでエリアストレス警報は一向に鳴る様子はない。

こんな日は藤や征陸あたりは「ラッキーな一日だ」と喜ぶものだが今の朱にとっては不運と言わざるを得ない。

——定時まであと5分。

デバイスで時刻を確認した瞬間、さらに振動のパワーを上げられ朱の腰がびくっと跳ねた。

「……っ！」

キツと男の方を睨みつけるが全くこちらに目を向ける様子もなく、肩手はスーツのポケットに突っこんだままだ。

——きつと内心ほくそ笑んでいるに違いない。

こんなことをされて腹が立つ——のと同時に、この身体に籠る熱から早く解放してほしい。

デスクの下で膝をきゅうっと擦り合わせて、機械からもたらされる刺激をやり過ぎそうとする。

——はやく、はやくはやくはやく……！！

「時間だな、上がっていいぞ。常守、狡嚙」

「ああ、じゃあお先に」

宜野座の掛けた声に狡嚙がそそくさと反応してひらひらと掌を振ってオフィスを出ていこうとする。

「ちよ……、っと待って下さい狡嚙さん！すこし、いいですかっ」

「なんだ、ここでいいか？」

朱も慌てて追いかけるように席を立てて狡嚙の手を引き呼び止めるが、返ってきたのはニヤリと意地の悪い笑顔とすつとほけた返事だった。

「こ、ここじゃ、ちよっと…お部屋、行ってもいいですか」

「ふうん？ま、好きにしな」

分かっているくせに、とはここでは言えなかった。

その代わり朱は掴んだ手首を離さず、ずんずんと先を急ぎ官舎へと向かった。

「もう、はやく…！」

ずるりともつれ込むように官舎の狡嚙の部屋に辿り着き、ドアが閉まるのを待たずに朱はワイシャツを両手で鷲掴みにして唇をねだる。

もう感覚という感覚すべてが敏感になり、背中にまわされた逞しい腕が上着越しに触れるだけで総毛立った。

「つたく、んな顔してオフィスをうろつくんじゃない」

誰のせいだ、と今日何度も思った科白は朱の潤んだ唇から漏

れることなく吸いこまれた。んん、と喉が鳴り舌を吸われてはくちゅりびちゅりと水音が口内で響いて、その熱い舌で上顎をぞわりと撫でられると脳天を突き抜ける快感が襲う。

狡嚙は抱きしめた朱の背中や細い肩の感じるポイントを確実に狙ってずるりと指を這わせ、びくびくと身体を震わせる朱の様子を目を細めにやりと口角を引き上げた。

「いやらしい」

耳元で低く囁かれてから熱をもった狡嚙の掌が上下する朱の胸元を這い、ブラウスとスーツジャケットの間に入り込んで手早く上着を脱がされる。指先がブラウスのボタンに掛かりぶつぶつと前を開いていくが、途中でまどろっこしくなったのか腰元から一気に引き抜き裾から性急に素肌をなぞられた。

「あ…っ！あんっ」

「ずいぶん敏感だな」

くす、と微かに笑う声が出て、それからカチツと乾いた音が朱の耳を掠めた。

「…っひう！あ、あああ…っやああん！」

突然震えだしたローターに陰核を刺激され、悲鳴が上がる。震えだしたローターが陰核を攻め、朱の身体に快感が走る。背筋を駆け上がる気持ち良さに抗えず、甘い悲鳴を上げた。

「イツちまったか？…ああもうぐしよぐしよだな」

狡嚙がずるりと指を滑らせてストッキングの上から下着を摩る。下着越しに震えるローターをグリグリと押し付けてさらに

弱いところを攻めた。

「ああっ、あんっ！やあああああ……だめえっ……だめ……っ！」

「言ったらろ？お仕置きだっ！」

「やあ……っ！もうっ、いじわるしないでえ……ッ！あっ……！」

達したばかりの身体は敏感に反応し、腰を跳ねさせ細い腕で狡囁の胸板にしがみつく。まだ乱れていない男の衣服に手を伸ばし早く早くと先を求めてボタンを外しに掛かった。

「んな焦んなよ」

ニツと口角を上げて狡囁が悪い顔になる。それから膝をついて屈み込み、ストッキングと下着を一緒くたにして引き摺り下ろし、一気に顔を寄せた。

「あっ……！ちよっと待ってください、まだ……ッ！ああっ」

「ん？」

「やあっ、まだ、シャワーも浴びてな……っ、んんんっ」

「お前の匂いしかしない」

朱が拒むように秘部を隠そうと這わせた両手を狡囁が軽々払いのけて、躊躇いなくべろりと舌で花卉を押し広げるように舐め上げた。

「やあんっ！うそ……ッ、あっあああ、ああああ……！」

「ああ、もうとろっとろだな……」

狡囁がじゆるじゆちゆっつと音を立てて吸い付き、舌を小刻みに揺らして蜜壺をノックし更に愛液を誘い出す。

昼間から刺激に耐え続けたそこは十分以上に潤いを蓄えてい

て、甘い舌の誘惑に素直に蜜を溢れさせていた。

朱はたまらず脚の間で動く狡囁の頭を鷲掴みにして快感に耐えようとするも、執拗に攻める舌技にたまらず押し上げられる。

「あっ、んんんっ、やめてえええっ……！も、だめえっ、あっああん！」

ガクガクと脚を震わせて再び頂上まで昇りつめると、狡囁がゆっくりと立ち上がり朱の身体を支えながら額にリップ音を立てながら唇を落としていく。

はっはっ、と朱が短く息を切らしながら降ってくる唇を受け止めながら快感に目を細めると、赤らんだ目元から流れ落ちた涙を熱い舌がすくった。

ちゆうっつと吸い付かれて、そのまま頬を通って唇まで辿り着く。ぬるりと舌が歯列を割ってくちゆりと口内を掻き回された。

「ふっ……っ、あ、んんんっ、うん……っ」

「は……っ、ん、どうした、手がおいたしてるぞ」

「だって……っ、ん、も、はやく……」

深く口付けをされている間に朱はそろりと指を忍ばせ、狡囁のストラックスの前を張り詰めたモノの形をなぞる様にすべらせていた。

「なんだ、もう欲しいのか？」

「んっ、もう……！」

指先にあたる熱い質量にたまらず縋り付きたくなって、朱は両手を伸ばしてストラックスのベルトを外す。



ジッパ―を引き降ろすのと同時にしゃがみ込んで勃ち上がった陰茎に小さな口をめいっぱい開けて下着ごとかぶりついた。

「ふ……っむん、はあっ、んんんっ……」

「……つく、あ、っつ」

ふっと布越しに熱い息を吹きかけると狡噛が低く呻く。その反応に気を良くした朱は目をとろんと蕩けさせて男を上目遣いで見上げ微笑み、下着のゴムに指を引っ掛けずり下ろした。

あっ……おっきい……んっ

ぶるりと飛び出した陰茎にほうほうと目を細め恍惚とした表情で硬く持ち上がったそれに頬を寄せて、愛おしそうに両手で握り込んでからふちゅんと口に含んだ。

いつも苦しいほどの快樂と幸せをもたらすこの男の分身が憎らしいほどに愛おしい。自分に与えられる快感のせめて半分くらいは返せているだろうか。

教えられた性技は全て彼からのものだけれど、いつも途中で「もういい」と止められて、あとはされるがままになってしまふ。あまり気に入ってもらえてないのかと不安な顔をする。決まって気持ち良すぎるのだと余裕に笑って返されてしまうのだ。今日こそは、と意を決して深く深く口に含んで舌を這わせる。根元をゆるゆると握ってはさすり、その動きに合わせるようにじゅほじゅほと頭を動かし出し入れを繰り返す。

頭上から聞こえる狡噛の唸るような吐息と荒くなっていく呼吸音に身震いするほど興奮し、空いた片腕で太く鍛えられた太

腿にしがみ付いて身体ごと前後させるような激しく愛撫を施した。

「んんっ…はっ、む…んあ」

「…つく、ああっ、あか…っもういいっ」

クツと歯をくいしばる狡噛が朱の口淫から逃れようと腰を引くが朱はしがみ付いて離さない。両手で腰にしがみ付いて口内で激しく狡噛の分身を扱く。

裏筋から舌で舐め上げカリをグリグリとねぶる。最後に先端の割れ目から溢れるカウパーをぐじゅぐじゅと舐めとり、思い切り口をすぼめて吸い尽くした。

「んんんっ…ふう…っ、うんんんっ」

「ぼっ…かやろ…っく、あっ」

爆ぜる瞬間に素早く陰茎が引き抜かれていくが、寸分間に合わず朱の口内にはドロリとした粘液と苦味が広がる。残りの白濁はびゆるりと弾けて床に座り込んだ朱の顎から首筋、胸元に飛んで白く輝く素肌を汚した。

「は、あん、気持ち良かった、ですか…？」

「ああ…ったく、どこで覚えたんだか」

「だって、いつも最後までさせてくれないから…今日の分も含めて、仕返しです」

ふふっと笑って見せた後、口の中の苦味を逃そうと口を一文字に結んでキュツと目を瞑ると、嚙下しようとした様子を察した狡噛が頤を掴んで無理やり口を開かされた。

「ふあ…っんむ、んんんっ」

「たく、んなの飲むな……ん、クソまずいな」

「ん…もう、あなたのですよ…」

強引に朱の口内から唾液と一緒に吸い出した精液の味に狡噛は眉を顰めた。

「…ね、もう怒ってないです？」

まだ少し息の荒いままの朱がちらりと見上げるように狡噛の表情を窺う。彼の言うお仕置きはもう終いにしてくれるのだからかと期待のこもった眼差しだった。

「ああ、こんなイイことされちゃあ、な」

「…っていうより、怒らせるようなことした覚えはないんですけど…」

「…覚えがない、ねえ？」

狡噛が小さく零すと朱はなんのことだと首をかしげた。

「…それより、さすがにその格好はヤバいな」

「はい？」

「今のアンタを見て勃たない奴は男として不能ってことだよ」

「えっ…！あっ、きやあんっ」

床に座り込んだまま背中が壁にもたれ掛けさせられ、両膝の裏を掴まれ高く持ち上げられる。秘部が狡噛の眼前に晒され片脚は狡噛の肩に掛けられ大きく開脚させられた。

くぱっと開かれた花唇に再び熱を持ち膨らみ始めた龟头を押し当て、ゆったりとした動きで腰を揺らして粘膜同士を擦り合

わせた。

「あっ…んん…！」

「はあ…つまだ濡れてんな」

くちゅつと音を立てて擦り付けられるも太いそれはまだ蜜口の中には侵入せずに花卉の溝をなぞり、プツリと粒立ったクリトリスをこすってヌルヌルと先端から染み出す狡囁の先走り液と朱の愛液を馴染ませるように掻き回す。

「ああっ、んっ…！もう、ほし…っ」

朱がじれったいように腰をくねらせ自ら熱を求めて尻を浮かせると、ようやく待ち望んだ太い楔の先が充てがわれた。

「欲しいか」

先端を押し付けたまま狡囁が耳元で囁く。コクコクと首を縦に振るが、男はニヤリと口角を上げたまま動かない。

「なら強請ってみろ。何が欲しいんだ？」

「やつ、こうがみさ…っ、もう、くださっ」

「んん？指の方がいいのか？」

意地悪く耳朵を舐め上げながら囁いて、くちりと水音を立てて指で秘部を鳴らす。いやいやと恥ずかしさで目を逸らそうとする朱の額を追いかけコツリと合わせてから瞳を覗き込んだ。

「ほら、こっち見て言ってみろ」

「やあっ、も、…やだあっ！もおはやく…っ」

待ちきれない快感に目尻からほろほろと雫が溢れて堪らずに狡囁に懇願する。

「あかね」

ゆつくりと名前を呼んで唇を吸う。

「あかね、ほら」

「こ、がみさ、ほしいの…っもう入れてえっ…おっきいの、くださ…っ」

「ああ、くれてやるよ…っ」

プツリと泡を弾けさせて肉棒が朱の花筒を抉り、襲を押し開き肉壁の弱い部分を突き上げた。

「ああああ…っ！あっあっ、んっ、ハア、おっきい、よお…ッ」

「ああ…ナカ、締まってるぞ…」

「んっ、もお…っち、いい、おっくうっ！おっく、いいのお…！ああ…ッ」

「ああ…奥、好きだもんな…っ」

ぐぶつと音を立ててより深く肉棒を突き立て子宮口を叩く。コリコリと鈴口で最奥の性感帯を攻めるとぞわりと蠢く肉壁がぎちぎちと狡囁を締め付けた。

「だめっ…あっ、イっっちゃ…！もう、イツ…あ、んっああああ…ッ！」

「ん、イケよ…っ」

「あ…っ！あ、あ、んっやあああああっ」

搾り取るような動きで中を締め上げ、朱が快樂の頂天へ昇りつめる。びくびくと脚が跳ね、それから縦るように狡囁の引き締まった腰に巻きついて離すまいと足首を絡めて引き寄せた。

「くっ、あ、イクぞ……っ」

狡嚙が細い方と華奢な腰に腕を回し、朱の身体が浮き上がる程にキツく抱き締めてから覆い被さる。そこから雄の本能のまま、激しく動き出した。

「アツアツ……やあ！ いったばっか……！ だめえっ！ イクッ！ またイッチャ……っ」

ばたばたとこぼれる涙を振り乱して、もう一度快感を駆け上がる。

「こ、がみさっ、すき……っ！ すき、すきです……っ、あ、あああっ」

「ああ、朱……あかねっ……っく、あっ」

ドクドクと弾け飛ぶ熱い欲が締め付ける膺の最奥に流れ込み、二人して身体を震わせ融け合った。

「もお！ 怒ってないって言ったじゃないですかあっ」

「だから怒ってないだろ？」

「いじわるでした！」

「はいはい悪かったよ。それより身体、痛くないか」

狡嚙が乱れて床に散乱した衣服を纏めて朱の身体に被せ、そのまま軽々抱き上げてシャワールームを目指す。

結局声も気にせず部屋の入り口で交わってしまったって床も二人の体液でべとべとでになっていたが今は構っていられたかった。

「大丈夫です。でも、わたしだって怒ってたんですけど……」

「はあ？ 俺の方こそ怒らせた覚えはないぞ」

「んな……！ 朝も昼も無理やり」

「あんたも気持ちよさそうにしてただろ」

朱の言葉を遮って、狡嚙がニヤと笑って見せた。

「もーいいです……。で、狡嚙さんはなんで怒ってたんです？」

朱が首に巻きつけた腕に力を込めて訊いた。

「さあ？ なんのことだか」

狡嚙がふんと鼻を鳴らして惚ける。

「ああーっ！ ずるいっ」

卑怯ですよ、と朱が顔を赤らめて迫る。

自分は正直に言ったのに、とでも言いたいのだろう。

昼間も必死にお仕置きに耐えて、先ほども理性が飛ぶほどじれったい思いをさせられたのに、その我慢と釣り合わない答えだったのがご不満なようだった。

——出来ることなら言いたくはない。

ちよっとした男の意地だった。

知らない男と話しているのを見ただけで、カッとなったこと。もしかしたら、自分という時より楽しいと思っているんじゃないかと不安になったこと。

いつまで彼女が自分の事を想っていてくれるのか、正直自信などないのだ。

「あんたがずっと俺の事を好きでいるなら、なんの問題もない」
心の中の劣情は押さえて、なるべく穏やかな声を心掛ける。

「はあ、嫌いになることなんてないと思いますけど……」

当たり前のように返ってくる返事が、本当は嬉しくてたまらないのだけれど。

「そうかい。ありがたいこった」

「うう、なんかうまく丸めこまれた気が……」

朱がぶくっと頬を膨らませて呟くと、狡嘴は目尻を下げてクスリと笑って宥めるように額に口付けたのだった。

PM8:00



「ふっ…あ、ん」

ぴちやくちやと水音の響く部屋には、人影はひとつ。

シーツの上でゆらゆらと身体が跳ねて、はあっ、と快樂の吐息がこぼれた。

A M O時

官舎の部屋の入り口で激しく求めあったあと、いつものように連れて行かれた浴室で、これまたいつものように交じり合って絶頂に昇りつめ、ふにやりと身体がとろけたのはつい数時間前のことだ。

今夜も泊まっていくかと誘って来たのを断ったのは、さすがに毎日毎日監視官が執行官の官舎から出勤するのは如何なものかと判断したからだった。

一般的な恋人同士であったならなんの問題もないことだろう。しかし二人は上司と部下で、善良な市民と潜在犯だ。周りの理解、信頼を得る為には怠惰は許されないことだった。

それはなにも朱自身の為だけではない。

善良な市民と潜在犯。何かあれば全ては潜在犯の、狡噛が責に問われるのだ。

「今日は帰ります。流石に二日続けて遅刻は出来ませんから」

「…そうか」

すこししよげた様な、そんな顔が実は好きだったりする。

そんなことを言ってしまったら、きつともう見られなくなってしまうだろうから言わないけれど。

「また、お休みが合う時に」

身支度を整えて部屋の出口へと向かう。

先ほどこの場所であられもない姿と声でよがって欲しかったことを思い出して少しだけ頬が熱くなった。

「ん、また明日な。おやすみ」

「はい、おやすみなさい」

ドアを開ける前にお互い自然に腕が伸びて、軽く抱き合う。

広くて逞しい胸に抱かれて、目一杯彼の匂いを吸って、名残惜しく吐き出す。するとゆるりと顎を持ち上げられて、ちゅうつと吸い付くだけのキスが降ってくる。それから暖かい唇が頬と脛と額を辿って。

それがいつものお別れのルーティーンだ。

「気を付けて」

さらりと髪を撫でてから、ドアを開く。じゃあ、とゆっくり身体がを返して、朱は家路についた。

嫌になる程抱き合って、身体は少し怠いくらいだったのに、なかなかどうして今日みたいな日は寝付けない。

繋がった後はあの力強い腕に抱かれて、ベッドから転げ落ちないよう抱き込まれて眠るのが当たり前になってしまっていた。こうして時々、情事のあとに一人になると、どうしても物足りなくなってしまうのだ。

「…あいたい」

別れたばかりなのに、満たされたはずなのに、帰ると決めたのは自分だったのに…。

「こゝろがみ、さん」

きゅっと臉を閉じてもぞもぞと上掛けの中で身体を縮める。

「…まだ、ほしいよ…。」

そつとパジャマのズボンに震える手を忍ばせた。

「あつ、ん、つう」

くちくちと粘膜が鳴らす音が一人きりの部屋に響く。自らの唾液と愛液で濡れた陰部を指でくちゅりと撫で回すと、ピクピクと太腿が震えて腰から背中にかけて快感の電流が流れた。

「あつあつ…こゝろ、がみ、さ…。」

シーツに顔を埋めて、頭で思い描くのはいつも強烈な悦びを与えてくれる男のことだった。

ひくひくと喉を引きつらせながら自分の指で自身を高めていく。

片手で花卉をばくばくと開き、もう片方の手で粒立つ陰核をゆるゆると撫でる。

指先で引っ掻いたり、根元からきゅううっと指で挟み込んで摘み上げたりを繰り返していくと、腰元に溜まった熱が背筋を駆け上がり脳天を突き抜けて絶頂に達した。

「あーっ…！んあ、あつあつ…。」

ここまでくると、もっと大きな快感が欲しくなる。

ひくつく蜜口がただらだと涎を垂らして欲しがっているが、その熱をくれる人は今はいない。

だから嫌なのだ。

こうやって一人で慰めるのは。

また寂しくなつて、彼の存在を思い知つて、より一層たまらなく欲しくなる。

「こうがみさん、こうがみ、ささ……」

物足りなさを埋めたくて自身の指を差し込んでみるが、どうにも満たされることはなく、少し荒っぽく手を動かした。

「ふ、あ、ああ……ッ、やだ……」

足りない、足りないのだ。

あの優しく色っぽい声が聴きたい。

欲情を湛えたあのたまらなく厭らしい顔が見たい。

厚みのある手が、逞しい胸板が。

そしていつも悦びをくれる熱の塊が欲しくて欲しくてどうしようもないのだ。

「こえ……、聴きたい」

ずる、と指を引き抜いてシートで拭ってから枕元の個人用携帯に手を伸ばす。履歴を開けば「狡嗜慎也」の文字が浮かんでいた。

『……どうした？』

寝付いていたのだろうか、少し掠れた声が電波越しに届く。

胸がきゆうと締め付けられるほどに切なくなつて、喉が詰まったまま言葉が出ずに黙り込んでしまった。

『あかね』

「……は、い」

やっとでた返事はやたら震えていて、彼に何か気付かれやしないかとひやりとした。

『……どうした』

何か感づいたのだろうか、確信したような言葉が返ってきて、困つたように眉尻を下げた。

「声が、聴きたくなっちゃつて」

『うん』

「……寂しくなっちゃつたんです」

『へえ？』

少し語尾が上がつた声がまるでこちらを疑っているようだった。

『あんた、ひとりでなにしている』

「べ、べつになにも……」

確証を得たようなはつきりとした物言いに思わずどもつてしまふ。

『夜中に声が聴きたいほど寂しくなつて？あんたの右手は今なにしてるんだ』

「やだ、もう、いじわる……」

『……もう突っこんでるのか？音、聞かせろ』

「やつ、ちが……ッ、自分じゃ、上手くできなくて……」

もうとつくにばれている。素直に白状して、電話越しに助けを求めた。

『電話、耳元に置き。両手で触ってみろ』

ん、と吐息を漏らして、スピーカーに切り替えて耳元で挟むように枕に端末を預けた。

『ぐちゃぐちゃか？』

「はい…もうすごい…っ」

『二本、指を挿れてみる』

「ふえ…っ」

『大丈夫、いつも俺のが三本入るんだ。気持ち良くなりたいたいんだろう？』

戸惑いで涙声になったのを察したのだろう、誘導するように名前を呼んで、ほら、と限りなく優しい声が耳を掠める。

「あ、あああ…！ん、もち…い…っ」

『ゆっくり、腹側に指を曲げて…、左手でクリ触れるか？』

「は、んっ…！触ってます…っ、んんあ、んっ」

『いやらしい音がこっちまで聞こえているぞ』

「あ、あつ、やだっ、だめえ…っ！」

ぐちゅぐちゅと一層激しい音がして、これも聞かれているのかと思うとさらに興奮して腰が跳ねた。

『は…、あかね』

「んんっ、しんやさ…っ、ほしいよお…っ」

『まったく、んななるくらいなら素直に泊まっていけばよかったんだ』

「だって…！あ、ああん、も…むりっ、あ、あ」

『っ、明日はこっちに来い…いいなっ、』

「あ…っ、しん、や、さ…？」

『お前のせいでこっちも大変なんだよ…っ、ほら、指動かせ』

「んんっ、はあ、や、や、んんあ！だめ…も、イツちや…あ…っ！」

『…っ、ああっ！イけ…っく』

きゆうっとナカが締めまり、絶頂を迎え身体を震わせた。向こうも昇りつめたのだろうか、荒い息遣いがスピーカー越しに部屋に響き渡った。

「やっぱり、ちよっと物足りないです」

『明日、嫌になるほどくれてやるよ』

はい、ここは素直に返事をしておく。明日また、苦しいほど愛されるのだと思うと、よろこびで身体が震えた。

それから優しい声で「ちゃんと眠れそうか？」と訊かれ、途端に意識が薄れ出す。

彼はきつと、すべてわかっていて付き合ってくれたのだろう。

「し…や、さ…」

『ああ、もうおやすみ。また明日な』

きちんとおやすみなさい、と返せたかも分からないまま、ふっと意識を手放した。

「たく、こっちの身にもなってみろ」

手の中で弾けた白濁を見つめ、狡噛は溜息をついた。

この原因である朱は物足りないと言いつつ、こてんと意識を手放し、夢の世界へ旅立ったようだった。

——こちらもひとりで慰めるしかない。

首を持ち上げ始めた自身を手に取り荒っぽく抜きあげる。朱と関係を持ってからは自分で処理することもだいぶ減っていた。俺だって欲しい。今すぐにでも。

先ほどの乱れた声と厭らしい水音が頭の中で繰り返される。

顔の見えないやり取りで、余計耳に残っていた。

『あ、あつ、やだつ、だめえ……!』

手早く操作したデバイスから聞こえてきたのは、先ほどの朱の嬌声だ。

「…わるいな」

勝手に録音してただなんて、ばれたら怒られるどころでは済まないかもしれない。パラライザーごときでおさまればまだいい方だな、とひとり思考を巡らせながら自身を握り込む掌にさらに力を込めて摩り上げた。

『んんっ、はあ、や、や、んあ!だめ…も、イツちゃ…あ——っ!』

「あ…、くっ、あかね…っ!」

這いあがる射精感に抗うことなく達して、音声の中の朱と

もに果てる。きつとこのときの彼女はいい顔をしていたに違いないだろう。それを思うだけで、やはりこちらも物足りないとか、狡噛はひとり息を吐いたのだった。

「また、明日な」

デバイスの音声を落として、寝具に身を投げだす。

明日はきつといい一日なるだろう。

朝から顔を赤くして戸惑いを隠せない彼女の姿が見られるに違いない。

自分の想像にフツと笑いを噛みしめて、広いダブルベッドの中でひとり臉を閉じたのだった。

終

コメント

* 如月 *

はじめまして、こんにちは。如月と申します。
この度、嬉しいことにあずきさんにお声かけ頂いて
初めて本を出すことになりました。
裏垢で呟いた一日中お盛んな狡朱を書きたい！という
わたしの妄想が現実となった本でございます(笑)
あずきさんの工口かわ狡朱を舐めまわすように読み返し
て自分の小説を書きあげました。
少しでも皆さんに楽しんでいただけたら嬉しいです。
あずきさん、色々にご親切にさせていただいてありがとう
ございました…！今後ともよろしくお願いいたします！
2015.9.26 如月

* あずき *

こんにちは！はじめましての方ははじめまして。
あずきと申します。この度はこちらの合同本をお手に
取っていただきまして、ありがとうございます！
今回、如月さんと一緒に合同本を出すことになって
本当に嬉しかったです！
終始工口い事をしている狡朱の本が出したいという願望を
如月さんとの合同本でまさか実現できるとは…w
個人的に残念だったのが、PM8:00のネタをしっかりと
描けなかったのがとても悲しかったです…(泣)
お風呂もしっかりかけなかったためどこで
なにやってんのかわけ解らんことになってますしwww
という反省もここまでにしておいて…

如月さん！えっちくて素敵な小説とイラストをかいて
くださって本当にありがとうございます！
これからもよろしくお願いいたします！
2015/9/28 あずき

愛欲性活24時

・発行日 2015年10月4日
・発行者 Lilium auratum/あずき
yukino.azuki@gmail.com
・印刷会社 栄光様

如月
pixiv:13955676
twitter:@kouaka1004

あずき
pixiv:2762536
twitter:@azuki_PPkxa
<http://liliumauratumxxx.web.fc2.com>

※無断転載・複製・オークションの出展
インターネット上での公開は禁止です。
※当サークルは原作の関係者様とは
一切関わりはございません。

※18歳未満の閲覧・購入・所持を固く禁じます。